

端的研究成果の報告が行われた。本研究所からは、社会保障基礎理論研究部の佐藤格室長および企画部の福田が参加し、東京大学や日本大学の研究者と行った共同研究について以下の報告を行った。

Setsuya Fukuda, Itaru Sato, Kazuyuki Terada, Takahiro Toriyabe, Hidehiko Ichimura, Naohiro Ogawa and Rikiya Matsukura. "Household production and consumption over the life cycle in Japan: NTA and NTTA summaries by gender from 1999 to 2014"

アジアからの参加は、私たちのグループのみであった。世界で最も高齢化が進んでいる日本の現状については関心も高く、この機会に情報発信を行い、他の研究者とネットワークを構築する機会を得たことは幸運であった。

また、2日間の会議の後に開講されたワークショップでは、AGENTA プロジェクトで作成・公表しているヨーロッパ25カ国のNTAならびにNTTAデータ (<http://dataexplorer.wittgensteincentre.org/shiny/nta/>) についての説明およびNTA/NTTAデータを用いた新たな高齢化指標の構築についての議論が行われた。AGENTA プロジェクトでは主要な目的のひとつとして、ヨーロッパで比較可能なNTAとNTTAのデータを構築することが挙げられている。ヨーロッパ各国には、それぞれ自国のNTAやNTTAを構築するチームがあるが、AGENTAではこれらのチームとは独立に、欧州内の「完全に比較可能な」データを用いて、国別の調整などは一切行わない「同一手法による推計」によってNTAおよびNTTAの値を計算している。このような比較可能性を重視したHarmonizedデータと各国チームが独自の工夫・調整の下に推計したデータをどのように使い分けていくのかは今後の課題となるように感じられた。一方で、AGENTAが行ったようなデータの公開と共有は、世界的な潮流となりつつある。今後は、公開されたNTAデータを用いた応用的・分析的研究が進んでいくものと思われる。

今回の会議およびワークショップでの報告資料は下記のURLにて公開されている。

<https://www.oeaw.ac.at/vid/events/calendar/conferences/agenta-final-conference/>

(福田節也 記)

台湾における低出産・高齢化と政策的対応に関する資料収集

厚生労働科学研究費による研究事業「東アジア，ASEAN諸国の人口高齢化と人口移動に関する総合的研究」の一環として、筆者が11月21日～25日にかけて台湾を訪問，専門家との面談と資料収集を行った。面談した専門家は、王宏仁教授（国立中山大学），蔡瑞明教授（東海大学），李美玲教授（中央研究院），謝穎慧教授（慈濟大学）等である。主に日本時代以来の台湾の国内・国際移動パターンの変遷について議論し，独力では探し出せなかった資料を入手できた。（鈴木 透 記）

第32回日本国際保健医療学会

2017年11月24日（土），25日（日）に，東京大学本郷キャンパス内で，第32回日本国際保健医療学会大会が，日本熱帯医学会，日本渡航医学会の大会と合同で「グローバルヘルス合同大会2017」として開催された。今年のテーマは「思いは一つ：健康格差の改善」であるが，例年通り，戦時下の医療から保健人材育成まで，多様なテーマのシンポジウム，口頭発表，ポスター発表，自由集會が行われた。

筆者は「日本とアジア諸国の高齢化対策連携の模索」と題するシンポジウムで報告を行った。このシンポジウムでは、アジアにおける介護人材の需給推計（筆者）、ブータン、韓国・シンガポールにおける高齢者ケア、民間、JICA、内閣官房のアジア健康構想の取り組みなどについての報告があり、最終日の午後にも関わらず、多くの参加者があり、議論も活発で、グローバルヘルスに関わる人々の間でも高齢化に対し関心が高まっていることを思い知らされた。また、このシンポジウム以外に、SDGsに関わる公開ディベートやグローバルエイジングに関わる自由集いにも参加・報告を行った。

（林 玲子 記）

一橋大学経済研究所附属社会科学統計情報研究センター 「人口統計に関する研究会」

2017年11月25日に一橋大学の国立西キャンパスにて、同大経済研究所附属社会科学統計情報研究センターが主催する「人口統計に関する研究会」が開催された。当研究所からは釜野さおり（人口動向研究部第2室長）と中川雅貴（国際関係部主任研究官）が参加し、研究報告を行った。この研究会は、同センターが毎年特定の調査・統計データに焦点を当てて開催する研究会シリーズの一環であり、本年は中央大学経済研究所社会経済マイクロデータ研究部会との共催により、人口統計を対象にした研究会が開催された。当日は、総務省統計局国勢統計課の担当者による平成27年国勢調査結果の概要に関する報告のほか、国勢調査の二次利用データを含む人口統計データを活用した分析事例が報告され、活発な質疑がなされた。研究会のプログラムは以下のとおりである。

1. 西千奈美（総務省統計局）「平成27年国勢調査について～人口移動集計から～」
2. 釜野さおり（国立社会保障・人口問題研究所）「諸外国の公的統計における非標準世帯の把握について」
3. 中川雅貴（国立社会保障・人口問題研究所）「国勢調査の二次利用データを用いた外国人の集住地区に関する分析」
4. 平川竜人（一橋大学）・白川清美（一橋大学）「IPUMS-I データベースに基づく世界の日本人」
5. 伊藤伸介（中央大学）「わが国における外国人の就業特性について」

（中川雅貴 記）

第12回人類生態学会国際会議（SHE）

2017年11月28日（火）から12月1日（金）まで、フィリピン・ロスバニョスにて、第12回人類生態学会国際会議（SHE）が開催された。人類生態学会国際会議は、第1回が1985年米国メリーランド大学で開催されてから、1-2年に1回世界各地で開催されており、第12回となる今回は、フィリピン大学が主催し、世界18ヵ国の研究者が「健康・高齢化と人口変化」、「持続可能な都市と景観」、「食糧と水システム」、「変容するコミュニティ」に関し報告・議論を行った。

筆者は長崎大学熱帯医学・グローバルヘルス研究科門司和彦教授が組織・企画した「アジアにおける長寿への挑戦」セッションにて、日本およびアジアにおける人口高齢化と介護需要・供給に関し、特に日本における人材の還流と並行したアジア全体の高齢者ケアシステムの開発と課題について報告を行った。

（林 玲子 記）